

大庭みな子

楊梅洞物語

©一九八四年
検印廃止

定価一三五〇円

昭和五十九年十月十五日初版印刷
昭和五十九年十月二十五日初版発行

著 者 大庭みな子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替 東京二一三四

ISBN4-12-001339-1

楊梅洞物語
目次

梅 月 夜	冬 の 林	新 し い 家	藤	飛 ぶ 花	柘 榴 と 猫
127	103	79	55	31	7

芽

149

ケンとジョー

173

仏手柑

193

エンドウマメ

219

化身

243

楊梅洞物語

題
字

著
者

柘榴と猫

桂一郎が東京から二時間余りも離れた楊梅洞ようばいどうに棲むようになったのは、妻の松子の妄想癖がつのり、くたびれてしまったこともあった。

息子の杉男が鉄棒から落ちて死んで以来、松子の被害妄想はますますつのって、運動好きの杉男がそんなことになったのは、体操の女教師が鉄棒になにか仕掛けをして殺したと口走るようになった。

もとはと言えば、その体操の女教師がちょっと美人で、彼女がデモンストレーションで生徒たちに美しい演技を見せているとき、桂一郎がついとうっとり見惚れていたのがよくなかった。だが、そんなことをするなといわれてやめる男もいないだろう。

松子はもともと女が嫌いだったが、今では、ありとあらゆる若い女を憎むようになり、桂一郎が電車の中で行きずりの女に眼をやったりするだけで、目くばせして意味ありげに笑ったと言いが、家に帰ってから、びりびりと自分の大切にしてゐる着物をひき裂いた。

「あの女のからだをひき裂く代りに、怖ろしい罪を犯す代りに、あたしはこうしてこの着物をひき裂いて、耐えているの」

なんともいえないいやな音を立てて、絹の織物が裂けると、松子は青く浮き上ったこめかみから汗をにじませて、歯をかちかちと鳴らした。

その形相を見ると、桂一郎は背筋が寒くなった。

松子は桂一郎を牢の中に閉じこめて、ベッドにくくりつけ、夜も昼もいたぶっていたいと囁いた。

「あたしはほんとうはそうしたいのよ。足に重い鎖をつけて、鉄格子のはまった窓からは蒼い海しか見えないような岩穴の中に閉じこめたいのよ。」

あなたは今までに見た、あらゆる思い出をその岩穴の壁にべたべたとはりつけて、喘いでいるしかないのよ。たくさんのひとたちの描いたいろんな御本や、絵などを持って来てあげるわ。それを読んだり、撫でたり、頬ずりしているのはかまわないけれど、外へ出ることはできないのよ」

ある晩、桂一郎は睡っている間に、手足を縛られてベッドにくくりつけられているのに気づいた。赤ん坊ではあるまいし、人からだをいじられて目醒めないはずなどないのだが、多分松子が睡り薬をこっそり飲ませたに違いなかった。

気がつく、あかあかと灯をつけた中で、松子は彼を見下ろし、執拗な愛撫をつづけていた。眼が吊り上り、口が耳まで裂けた猫の顔だった。ざらざらの舌で舐められると、肉がはがれて、骨がむき出しになる感じだった。

彼が哀願し、なぶられた仔犬のような嘆き声を立てると、彼女の眼はきらめいてきて、糸切り歯から光った糸がしたたり落ちた。

妙なことだが、彼はそれ以来、どっちみちがたがた言われるなら、そういうやり方も悪くはないと思うようになった。

「あたしたちはべつに東京にいる必要はないんだわ。あなたは週に三日大学に出ればいいんだし、あとは閉じこもって、本を書くべきよ」

彼はアメリカ文学史を書き始めていたが、いっこうに進まなかったその気になった。

伊豆半島の付け根の東海岸寄りにある楊梅洞はむかしは楊梅が洞と呼ばれていた。「やまももがほら」という名前が長すぎて、舌がもつれるのできつといつの間にか短く音読みになったのだろう。

そこはほんの十年前まで、鉄道も通ってなくて、ところどころこんもりと繁る楊梅の森を除いて、櫟や檜やえごのきの雑木の樹海で、むかしは陸軍が演習場に使ったが、出られなくなった兵隊が死んだりした。

海岸線は切り立った岩場で、磯釣りによいとされ、あじやめじなや、ときにはかなりよい大きなのいなが釣れることもあった。

十年ほど前、鉄道が引けて観光地として開発され、遊園地や熱帯植物園やみかん狩りなどで売られるようになり、大規模な別荘地を分譲し始めてから、急に人が集まるようになった。

軽井沢などと違い、一年中温暖なので、最近では引退した老夫婦や、寮の管理人などが永住するようになり、生活に不便でない程度の店も何軒かできたので、仕事の種類によっては大都会で住むよりはよい向きもあった。

戦後間もなく、娘を嫁入りさせるために金の要る親戚筋の者から義理で安く五百坪ばかり買い、山の中のことなのでほったらかしにしておいたものを、あたりが開けてから庵^{いほ}めいたものを建て、ときどき夏に行ったりしていた。

杉男がいる頃は、かぶと虫やかみきり虫やくわ形などを採るのを愉しみにしていた。

「あなたは、働くために生まれて来たんじゃないわ。子供もいなくなつたし、あたしたちが生きていけさえすればいいのよ」

といかにもまともな言い方で松子が言ったので、彼は専任の横浜の大学だけ残し、非常勤の他の大学はみんな辞めてしまった。

時間がもうそんなにないと思ひ始める年頃だったし、人と一緒にいると、言わなくてもよいお

世辞を言ったり、つまらない機嫌をとったりしてしまふことに腹が立ち始めていた。そうしたか
らといって、不安でなくなるわけでもないのに、と桂一郎は思うようになっていた。

楊梅洞という名は、楊梅が高さ十メートルの余、直径が一メートルにも及ぶ喬木で、密生した
常緑の草が、あたりを暗くするほどに繁り、あたりが洞ほらのような感じになるからそうつけられた
のだろうと思われる。

桂一郎は楊梅という音を好まず、自分の庵は山桃庵さんとうあんと名付けて、これからは木や石でもいいじつ
て暮そうかと老人じみたことを考えた。

しかし、いざ都会から退いて、鬭争的でなく暮している人たちの中で、じっとしていると、や
はり人恋しく思われる日が多かった。

学生の中にはハイキングに出かけるつもりで、ときどき訪ねてくれる者もいたし、横浜近くの
友人たちが多かったから、ときには訪問客もあるのが救いだつた。

松子は滅多に外出しなかったが、その日は珍しく、前から出かけるようなことを言い、桂一郎
は内心ほっとしていた。

朝の食事のとき、松子は何か考えごとをしていた。

「この頃のしめじは香りがいいね」

と桂一郎が言っても聞こえなかったし、御飯の茶碗を持ち上げて、汁椀のようにすすりかけた

りした。

食事が済んだとき、のぶあさんがお萩を持ってやって来て、吉井夫婦の話を始めた。

「三千万円持って行ったんだってよ。ずいぶん溜めたねえ。吉井さんは働き者だったもの。出て行く者はしょうがない、家はやれないからって、現金をやったんだってさ。へ別れるのが遅すぎたよ」って、あたしゃ言ってやった」

のぶあさんは吉井さんの主人の肩を持った。

「もっとも、奥さんを殴って首をしめたんだってさ。奥さんが指の跡をみせたんだよ。ほんとに赤黒く指の跡がついていた。まあ、夫婦喧嘩は犬も喰わないって言うから、さわらぬ神に祟なしてことで、黙っていればよかったんだけど、ついあたしもお人好しで相槌を打っちゃったんだよ。」

三千万円巻き上げられたって、しょげていたもんだからね。それなのに、帰って来たんだってさ。のこのこ。あきれたねえ。

奥さん、今度、どんなこぼし話されたって、ふんふん、雲でも眺めて上の空の返事しとくに越したことはないよ」

吉井の妻が病気で寝ていたとき、出入りの植木屋が親切にして、面倒を見すぎたのが夫婦喧嘩の原因で、熱のある妻を寝床からひきずり出して殴る蹴るの乱暴を働き、相手の植木屋もはり倒

して怪我させ、植木屋の妻が訴訟を起しかけたというのがそのごたごたの原因だった。

松子はその話を眼をうるませて聞いていた。彼女はいつも、桂一郎がやきもちを焼かないことに腹を立てていた。

のぶばあさんが帰ったあとで、松子は言った。

「あけ方、妙な夢を見たわ。」

あなたの女と赤ん坊を殺す夢よ。お産のすぐあとだったのよ。まだ臍の緒と胎盤がくっついていたわ。

それを、滅茶苦茶に刺してやったのよ。女が眼を開いたままだったのよ、その眼をえぐりつけてやったのよ。どろんと、卵の白身のようなものがついた丸い眼が床にころがったのよ」

「ああ、怖い」

桂一郎は大仰に肩をすくめて、新聞を投げ出した。

「あなたがシャベルで土を掘って、あの木の根元に埋めたのよ」

松子は庭の柘榴の木を指さした。

そこは昨日、桂一郎がりんどうを植えるために掘り返して、新しい土が黒く盛りあがっていた。松子がぶらさげたててる坊主が首吊りの恰好でゆれていた。

「いったい、いくつてる坊主を吊したんだ。そこらじゅうにぶらさがっている」